

れば空性無境とは境智不二、色心不二の意なり。疏に曰く  
 空性即是自心等虚空性(中略)前劫悟萬法唯心外無法今觀此心即是如來自然智  
 亦是毘盧遮那遍一切身以心如是故諸法亦如是云  
 影像不出常寂滅光故曰無相以心實相智覺心之實相境智皆是般若波羅蜜故曰無  
 境界

大日經疏有快鈔の意に依て此文を解せば、空性とは一心は虚空の如く法界に周  
 遍し、萬法即一心にして、心と境との不二なる義を明かすものなり。これ止觀  
 に此心は一切法、一切是心と釋すると同意なり。

無境界もまた境智不二の義なり。疏の文に境智皆是般若波羅蜜故曰無境界と  
 云ふ、この境智皆是般若波羅蜜とはこれ境智不二の義なり。般若の言は境智を  
 含攝す。即ち實相般若の如きはこれ境なり、觀照般若の如きはこれ智なり、さ  
 れば般若の言は境智不二を明かす。

これまた文句に境既無量無邊常住不滅智亦如是函大蓋大等の境智不二を説く  
 義と一致せるものなり。

### 三 所攝の宗教

十住心論及び秘藏寶鑰に第八住心を釋するに當り、法華經、涅槃經、智度論、  
 中觀論等を所依として一家の義を構ひたる天台宗の義を明かせり。今其義趣を  
 略述せんに、

釋迦如來三十歳にして菩提樹下に正覺を成じ、八十歳入滅に至るまで五十箇  
 年說法度生をなし給ふ。而して凡夫二乗等の淺近なる機根を訓練し、成道已來  
 四十餘年、此等二乗等の爲めに未だ如來自證の眞實を説かざりしが、四十餘年  
 にして此等機根の純熟せるを見て、如來内證の眞實義たる純圓一實の義を説か  
 れたるものは妙法蓮華經なりとす。寶鑰に、三七觀樹四十待機と云ふものこれ  
 也。即ち如來成道三七日の間、菩提道場に趺坐して海印三昧に住し、一乘教義  
 の華嚴經を説く、然も無盡圓融の華嚴の玄旨たるや、理趣深うして凡夫二乗の  
 了知し能はざるところ、たゞ深位の菩薩のみ聞知することを得たり。即ち天台  
 に云ふ藏通別圓の四教の中、華嚴經には別圓の二教を説く、圓機の爲めに初發  
 心時便成正覺の圓教の義を示し、兼ねて權機の爲めに行布次第の別教の旨を明

かす。日出で、先づ高山を照らすも、直に幽谷に及ばざるが如く、成道最初の華嚴經の會座には別圓頓大の機、教益を被ることを得たるも、小乗の機にはたゞ大乘の法門を擬はれたるまでなり。されば華嚴の會座に小乗の鈍機益なかりしゆゑ、華嚴三七日の説を擬宜の教と云ふ擬宜とは機の宜樂に擬ふの義也。如來大乘を以て衆生を度せんとし給ふ、然も大乘の教義を信修し得ざる小乗鈍根の爲めに鹿野園に趣き、十二年の間阿含經を説き小乗の機根を化益す。これ如來の日光三藏教の光影を放て漸く幽谷を照らすものにして、小乗淺近の法門を以て小機を誘うて大乘に引導するもの也。されば第二時阿含經の説時を誘引の教と云ふ。

第三時に方等經を説き給ふ、方等部の經とは維摩經、大集經、楞伽經、解深密經等なり。此等の經を方等と云ふは方とは廣の義にして此等の經は四教並べ説くが故に方といひ、等とは平等の義にして、四機等しく教益を被るが故に等と云ふ、此の方等經は佛成道以下何年に説き給ひしやにつき異説あり、方等經に別の説時を立つる説は阿含經十二年説時の後、方等經十六年間説き給ふ、此

二時の説時合して二十八年也、後般若十四年説き給ふが故に此等説時を合すれば四十二年也、而して成道四十二年後法華經を説き給ひしと見る。また方等經に別の説時を立てざる説は阿含十二年の後般若經三十年説く、此般若三十年の内の方等を説くと見るもの也。

方等經をは彈訶の教とも云ふ。即ち如來成道後十二年小乗教を説き給ひしに此小乗を信奉せしもの人空の理を證し、小乗の阿羅漢果を得て至極と思惟し、佛と同等なりとの思ひをなすに至りしが故に、此二乗の證果のなほ淺近未眞實なるを指示するを彈訶とは云ふ也。彈訶とは彈とは射の義、訶とは責也。即ち小乗の人空の理に偏執するを彈射し呵責するを云ふなり。

方等部には藏通別圓の四教を俱説す。これ通別圓の後三大乘を以て小乗の執を破せんが爲めなり。或は方等部の會座に大小乗の機並存するが故に、其機に應せんが爲めに四教並説すとも稱す。方等經にて彈訶せられし小乗の聲聞緣覺この彈訶の教益に依り冥成通人として通教の二乗となれり。通教はこれ大乘の初門にして因緣生の諸法の當體即空の理を説く、この因緣生の當體即空の理には

大乘の甚深の中道の理を含む。故にこの通教の空理を通真含中と云ふ。

第四時に般若經を説き給ふ。此般若經を淘汰の教とも云ふ。前の方等經にては四教を俱説し、通別圓の後三教の大乘を以て藏教小乗の偏執を破せしゆゑ、大小乗の法門各別なりと思へり。今般若經に來りて一切法皆大乘なりと説き大小乗の法門を融通す。こゝに於て大小乗の法門隔別なりと思ひし執情を洗ひ流す。即ち淘汰とは洗滌の意なり。般若皆空の智水を以て大小二乗の別執を洗ひ盡す。但し般若の時に大小乗の法門の隔執消融したるも。なほ人は大小の不同あるとの執蕩けざるなり。寶論に初轉、四諦方等、洗入法、之垢穢とは以上の阿含方等般若の教益を明し、後灑二雨、圓音、香草木之芽葉等は次の第五時法華經の教益を明かす。

第五時に法華經を説き給ふ。上述の如く釋迦如來は三十歳成道の後十二年阿含を説き次に三十年方等般若を説き、四十餘年機根の純熟を待ち未だ眞實を顯はざりしが、法華に至りて始めて如來の本懷を吐く、即ち華嚴の時に擬宜し阿含の時に誘引し、方等の時に彈訶し、般若の時に淘汰し、小乗の鈍機漸く調熟

せられたれば、法華の會座に至りて圓一乘の妙法を開示し給ふ。

凡そ法華經一部八卷二十八品あり、而して前の十四品は迹門にして後の十四品を本門とす、前十四品の迹門の本旨は諸法實相の妙旨を顯示して、三乘を開會して一佛乘に歸入せしむるにあり。即ち前十四品は開三顯一の理を説き九界の衆生同く一佛乘に歸し、凡夫二乗等く成佛する旨を明かす。法華以前には定性の聲聞緣覺無性有情は成佛せずと示されしも、法華の迹門に至りて初めて一切衆生皆成佛道の理趣明かさる。

寶論に會三歸一、讚佛智之深多、文或は一實之理吐本懷、於此時無二之道得滿足、於今日等と云ふものこれなり。

後の十四品は本門なり。この本門の要旨は久遠實成の旨を宣暢し開近顯實を説くにあり。迹門には諸法實相を説き十界の衆生皆成佛すべき旨を明かすも、未だ釋迦如來成佛以來無量無邊の劫數を経たる久遠實成を宣語せず、即ち始め華嚴阿含方等般若及び法華迹門十四品には如來も今日菩提樹下に始めて成佛すと説き給ふ。これ垂迹示現の化儀なれば迹門と云ふ。次に本門には釋迦如來五

百塵點劫の昔より成佛し給ふことを顯し今日始成の近情を廢す故に開迹顯本と云ふ。

法華經壽量品云一切世間天人及阿修羅皆謂今釋迦牟尼佛出釋氏宮去伽耶城不遠坐於道場得阿耨多羅三藐三菩提然善男子我實成佛已來無量無邊百千萬億那由他劫文

寶論に指本遮末談成覺之久遠等は何れも本門の教意を釋せるもの也。

迹門は諸法實相の理を明かし、三乘即一乘と開會し、一切衆生皆成佛道の旨を説く、これ即ち開權顯實にして所謂迹門の開顯なり此の如く迹門の開顯に依て、二乘三乘等各別なりとの所化の衆生の權情の執蕩けたれども、未だ久遠實成の能化の佛の實相顯れず、故に開迹顯本の本門の開顯あるなり。法華經第十四安樂行品までにて迹門の説終り、第十五涌出品より本門の説法に入る。而して涌出品には無量の菩薩大地より涌出せり、この無量の菩薩衆を悉く釋迦如來の弟子なりとの給ふ。然るに釋迦如來成道以來僅かに四十餘年にして如何にして、かゝる無量の菩薩衆を得度し給ひしやとは諸大衆の疑心なり、こゝに於て

彌勒菩薩諸大菩薩に代てこれを如來に問ひ給ふ。涌出經に始過四十餘年世尊如何於此少時大作佛事文寶論に娑界震裂四唱一處或は等覺彌勒惟子年之過父と釋せられたるものこれなり。之によりて第十六壽量品に至りて、釋迦如來自ら一切世間の天人阿修羅等は、皆今の釋迦如來は、王宮を出て出家修行し三十にして初めて成道せしものと思ふならんも、我れ成佛して已來無量無邊百千萬億劫を經たることを説き、近成の蓋を開て久遠實成の本門を顯し給ふ。

然れば本迹二門は其所説の法門につかば淺深の差あるも、其所顯の理趣は本迹異なりといへども共に一實相の理なり、寶論に十箇如是安止觀之宮殿寂光如來融境智而知見心性應化諸尊願行願而分身隨相寂而能照照而常寂似澄水之能鑒如瑩金之影像濕金即照影照影即金水即知境即般若般若即境故云無境界等の文は其實相の理を示されたるもの也。なほ十住心論第八には止觀を引き三千三諦の旨を明かし、諸法實相の玄趣を示せり。諸法實相の理は源と法華經方便品第二に出づ

第一希有難解之法唯佛與佛乃能究盡諸法實相所謂諸法如是相如是性如是體如是

是力。如是作。如是因。如是緣。如是果。如是報。如是本末究竟等。文

一念三千一心三諦の諸法實相の圓教の妙理は、この法華の十如是の經文に依て立つ、諸法とは十界の依報正報なり、實相とは中道の理體なり、即ち諸法實相とは萬有凡て中道の妙體なりとの意なり。天台には色心の諸法皆三千の妙法を具せる實相の體なることを明かす。一念三千とは一心に地獄・餓鬼・畜生・修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十法界を具す、この一心に具するところに十法界の一界ごとにまた十法界を具すれば百法界なり、此百法界の中の各々に如上の十如是を具すれば千如是なり、この千如是に衆生世間、國土世間、五陰世間の三種の世間を具すれば三千世間なり、此三千の諸法全く行者の一念心なりと觀するを一念三千の觀門とす。

輔行曰於一念心不約十界收事不徧不約三諦攝理不周不語十如因果不備無三世間依正不盡。

法は本より無自性にして隔てなきものなれば、凡て三千圓具の妙法實相の體ならざるはなく、心佛衆生の三法何れも三千の諸法を具し、無差別なれども、衆

生法はただ廣く佛法はただ高うして、初學の行者は觀じ難きが故に行者の一心について三千三諦の妙理を觀するを易しとす。即ち止觀に介爾有心即具三千と云ふ。心法は行者の所觀に於て最も近要なるが故に心に約して本具三千の妙觀を明かす。

十界の諸法は無自性にして隔てなきが故に各々の諸法皆三千の妙理を具し、一を擧ぐれば皆一切を收む、而して此三千空假中なり。即ち三千は法體にして三諦は法の徳なり。始終心要に三諦者天然之性徳也。三諦とは三千の法體の上に本來具する徳なり。三千の法體に三諦の徳を具するが故に、一念が直に三千圓具の妙體なること顯るゝ也。三諦を略叙すれば空は破情、假は立法、中は絶對の義なり。空諦とは法は無自性の故に何れを何れと分別すべからず、もし迷情を以てこれは人なり、鬼なり、佛なりと定むるときは其自性に契はざれば、皆破せざるべからず故に空諦を破情とす。

次に假諦とは上述の如く法に一定の性なきが故に縁に隨うて如何なる法とも現はるゝを假と云ふ、即ち假は立法の義なり。次に中は絶對とは法に一定の性

なきが故に縁に隨うて種々の法を現す、これ空の故に假なり、又縁に隨うて種々の法と現るとも、これは佛なり人なりと定むること能はずこれ假の故に空なり。かくの如く空と假とは一體にして彼此の對待を絶するは中なり。而して空假中と三を分てども、只一の法に具するところの徳なるが故に其體三にあらず、體一互融にして三諦即一諦、三一相即して無礙なるを圓融の三諦と云ふ湛然の止觀大意に

此妙境爲諸法本故此妙觀是諸行源中略上根一觀橫豎該攝便識無相衆相宛然等即ち一切の法三千の理に依らざるものなければ、妙境爲諸法本といひ、一切の修證は皆此三觀より出づれば此妙觀是諸行源と云ふ。三觀とは上に明かせし三諦と其體同なり三諦は所照にして三觀は能照なり、三觀の智を以て照せば依正色心の差相混亡し、所謂無相にして衆相宛然たるを識り、本具三千の妙體顯現して、一切國土は常寂光土と顯れ、一切衆生は皆毘盧遮那の體と顯る。

なほ寶論には寂照不二、境智一體の旨を明かし、以て大日經の境智の一體を悟るを如實知自心と云ふ文義に同會せしむ。

寂而能照照而常寂似澄水即能鑒如瑩金之影像濕金即照影照影即金水即知境即般若般若即境故云無境界即此如實知自心名爲菩提等。

天台の意にて境智の不二を釋せば止觀に

常境無相常智無緣以無緣智緣無相境無相之境相無緣之智境智冥一而言境智故名無作也。

境とは三諦にして智とは三觀なり、此諦と觀とは名異にして體同なり。境と云ふも智と云ふも法は本より同じものにて變りたるものにあらざれば境智不二と云ふ。大師は境智の一體の義を示さんとして、似澄水之能鑒如瑩金之影像といへり。即ち鏡と鏡中の影像と一體不分なるが如く、境と智無別なり。

この境智の不二なるを無境界と云ふ、此の如く心は是れ一切法一切法はこれ心なる境智の一體を悟るを如實知自心なりと示さる。

#### 四 能攝の住心

大日經住心品疏冠註に曰く

他緣乘雖立萬法唯心非諸法即心識所變諸法故云唯識而實別種子生故心境各別。

別說

三論宗談眞水因妄風動成七轉故有爲在妄眞如唯無爲耳。此故雖言色空不二而實事理隔歷。法相三論同立二諦未宗三諦此是義也。

即ち第六住心は諸法唯識の義を明すも心は有、境は無なり、第七住心は心境の俱空を説く、而して有即空なるが故に空即有にして有空の相即を談ずるも、然も其宗とするところは有空を混絶せる無所得に住するにあり、今第八住心は萬法は無所得、無自性にして隔てなきが故に一心一切處に通じ宇宙萬有一心に攝盡し、諸法皆心の實相なる理趣を明かす。

心等虚空一切處に通じて諸法を攝するが如く、諸法も亦等虚空一切處に通じ萬法を攝せざるはなく、一心これ萬法、萬法これ一心、この心境不二の實義を知るはこれ一心の實相を覺るものなるが故に、第八住心の下に眞言行者頓悟秘要の淨菩提心觀たる如實知自心の經文を引證せらる。眞言行者の初地淨菩提心の三句の中、因の句の實義を明かす經文を何故に第八住心に屬當し給へるやにつき諸説あるも、宥快法印の義によれば眞言行者の初地因の句は必ず遮表不二なり、然るに彼の第八住心の所明の理此初地の遮情の一分に同ず、是の故に亦

如實知自心と名づく、若し至實に至ては第八住心の人、驚覺開示を蒙り遮表不二の初地佛果に入るものとす。

第八住心の下に大日經第一に淨菩提心觀を明かす文を引き給へり。今其一二の文義を述べんに、

云何菩提謂如實知自心

云何菩提の菩提菩提とは梵語覺と翻すはこれ菩提を求めんとする能求の菩提心なりや、また所求の菩提の體なりやのこと異説あれども、所求の菩提と見る方可なるべし、所求所詣の菩提の果とて遠く他に在るにあらず、自心これ菩提の體たるが故に、實の如く自心を知れば一切智々の大覺の佛果を圓滿するものなる旨を明かして、云何菩提謂如實知自心と云ふ。次に其自心とは如何なるものなりやを示さんとして自心は無相にして衆相を具し、宇宙法界自心の外にあるにあらず、皆自心實相なる旨を明かす。

秘密主是阿耨多羅三藐三菩提乃至彼法少分無有可得何以故虚空相是菩提無知解者亦無開曉者何以故菩提無相故秘密主諸法無相謂虚空相

即ち此文は菩提心は無相にして萬法を具し、菩提心の外に一法も無き義を明かす。阿耨多羅三藐三菩提は梵語にして無上正遍知と翻じ、新譯には無上正等覺と譯す。この無上正等覺は、これ即ち云何菩提の菩提を指す、遮情無相の義にて、此經文を解すれば、菩提の體は無自性無相にして、所謂所證の相もなく能證の相もなく能所契合の相もなく畢竟無相なること虚空の如し、即ち虚空の知解すべき相もなく、雲霧を開ても開顯すべき相なきが如く、菩提は無相にして少分も得べきことあることなし、而して菩提の無相不可得なるが如く、諸法も亦衆因縁所生法にして無自性無相なること菩提に異ならず。

此の如き遮情無相の釋は經の正意にあらず、疏には表徳無相の義にて釋せり即ち菩提心は無自性無相の故に菩提心に萬有を融攝し、菩提の外に心外の彼法として少分も得べきものあることなし、菩提心の無相を虚空に比するはこれ虚空の一切處に遍在せるが如く菩提心も一切處に遍在し、また虚空の萬像を包含して盡さざるところなきが如く、菩提心は一切諸法の所依體にして、諸法は菩提心の徳相なれば一法として菩提心を出づるものあることなし、此義を以ての

故に菩提心を虚空に比するもこれ小分相似を以てなり。然も此菩提心に具する甚深無量の法性の功德に至ては、世間の虚空のよく比喩し示し得べからざるなり。而して先徳此菩提心表徳の實義を高祖の教義と一致に釋せらる。此の如きは今の當分にあらざるが故に略す。

所求の菩提心は能求の衆生の心に外ならず、自心即ち菩提なれば能求所求能覺所覺等の不同立せざることとなり、自心即佛なれば修行進趣の要なかるべしとの疑ひあり。

爾時金剛手復白佛言世尊誰尋求一切智誰爲菩提成正覺者誰發趣彼一切智々々道範の遍明抄の意に依て此文を解せば、凡そ佛教に實相平等門と因果差別門との二門あり、其平等門よりいへば、自心即佛、迷悟一際なるが故に能求所求、能覺所覺の不同なかるべし、金剛手の疑難は此平等門より起る。これ金剛手未來の衆生の疑惑を斷せんが爲めに、かゝる疑問を發せられたるものなるが、今日なほ佛教に對して、かゝる疑難を加ふるものあり。佛教は萬有神教にして衆生の自體そのまゝ神なり、我心即佛なりと説くものなり、我身即佛ならば向上



進修の熱烈なる求道の念、起し難かるべしと、然もこれ佛教々義の平等門の一面のみを見て、其差別因果門あるを知らざるより起る疑難なり。如來は金剛手の疑問に答へて曰く

佛言秘密主自心尋求菩提及一切智何以故本性清淨故

即ち平等門よりいへば衆生本來法身と同一體なれども、衆生は其自心の實相を知らざるが故に、惑を起し業を造り生死に輪廻し永く佛と異なるなり、故に深省を發し自心の菩提を求め、自心に萬行を修し、自心の大菩提を成すべきことを明かせり。なほ廣く諸法に經て心の無相なること及び平等即差別、即ち不生即而生、實相即因果の實義を示し、無相に住し而も大悲萬行方便波羅蜜具足すべきことを明かせり。經に曰く

秘密主。心虛空界菩提三種無二。此等悲爲根本方便波羅蜜滿足。

疏に其經意を釋して曰く、  
即此一法界心雖因緣畢竟不生而不壞因緣實相以不生故則無能所之異以不壞故亦得悲爲根本方便波羅蜜滿足。

五 第八住心究竟にあらず

一

大師第八住心及び其所攝の宗教たる天台宗のなほ未了義の教なることを示して曰く

釋曰謂無相虛空相及非青非黃等言並是明法身真如一道無爲之真理佛說此名初法明道智度名入佛道初門言佛道者指金剛界宮大日曼荼羅佛於諸顯教是究竟理智法身望眞言門是則初門大日世尊及龍樹菩薩並皆明說不須疑惑

前陳の如く第八住心には無相の菩提心に安住する義を明かし天台宗を當住心の所攝となす。これにつき當住心の大綱は不思議の三諦を以て宗極とす、二教論には此宗所觀不過三諦一念心中即具三諦以此爲妙といひ、今の釋文には法身眞如一道無爲之眞理と云ふ。共に當住心は三諦一實を宗要とするを示すもの也。然るに今所引の淨菩提心觀の文を見るに、無相虛空相及非青非黃等といひたゞ空理を詮するに似たりとの疑ひあるも、上述の如く經文に菩提心と指すところはは一心體性にして、この一心無相にして衆相を具し、諸法悉く一心の實相なる

玄旨を述べれば、これ三諦一實の義を示すものなること經疏の文明か也。

然かれば天台宗の三諦觀と、眞言行者の頓悟秘要の淨菩提心觀とは同義にして、俱に三諦觀を修するものなれば、顯密二教の教義の區別立せざるることにならずやとの疑ひあり。一往釋相より見れば即ちかゝる疑惑の存するものあるも大師の高範に依れば、顯密二教の教義の法體天淵の差あるなり。今の御釋に曰く

於諸顯教是究竟理智法身望眞言門是初門等。

即ち今の御釋及び二教論其他經疏の明文によれば、顯教の三諦説はこれ緣起因分の諸法の上に立せし説にして、密教の三諦觀は不二果界の上に立つる説なり。果實私鈔に天台所立の三諦は密教に入る初門なることを明かし、天台の三諦は所説巧妙なれども、これ無明緣起の諸法に就て立つるところの三諦の理なり、隨て圓融の三諦を談すといへども、三密具足の法體を明かさず、されば圓融不思議の三諦も畢竟遮情方便説なることを釋せり。顯教は遮情の理觀の上に立つる三諦なるゆゑ、衆因緣所生萬法は無自性にして隔てなければ一塵一香に宇宙

法界を攝盡すといひ、密教は果界の上の三諦説なるが故に、三諦義は衆生の色心の自體本有にして、無盡曼荼の諸尊の三密を攝盡することを明かす。されば同く如實知自心を談するも、第八住心の所説と第十住心の所明と本より同からず。高祖大師十住心論第十に眞言乘の如實知自心の意義を釋して曰く

秘密莊嚴住心者。即是究竟覺知自心之源底。如實證悟自身之數量。所謂胎藏海會曼荼羅。金剛界會曼荼羅。金剛頂十八會曼荼羅是也。

經云云何菩提謂如實知自心。此是一句含無量義。豎顯十重之淺深。橫示塵數之廣多。云云

經疏に顯密二教の行者共に三觀を修するも、其所用各別なることを明かせり。顯教は偏に一心の利刀を翫び理觀に住するが故に三大僧祇を経て法界に悟入す。密教は三密の妙行を修し悉地現前の時、空假中の三觀に住し頓に法界に悟入する也。大日經住心品疏に曰く

以皆從緣起。即空即假即中。故曰如實遍知一切心相。阿闍梨言行者初修觀行境界現前時。由內因外緣力。故自然有緣起。智生不同常途。習定功力。苦至而後通徹也。

其他大日經第七卷に眞言行者の三諦觀を明かせり、亦以て顯教の三諦觀との不同を知るべし。

今眞言門亦爾。以觀爲因、三密爲緣、普門海會現前、不謬故名爲有。以種種門推求、都不可得是名爲空。此有此空皆不出法界、故說爲中。三諦不同而同、不異而異。一切方便乘人不能思議云云

二

眞言乘の初地果上の三諦說に遮情表徳の二義あり、その地前遮情の三諦說は緣起因分の天台の三諦說に同するが故に、眞言行者の初地淨菩提心觀の文を天台宗に配屬せり。而して天台に三千三諦の妙旨を述ぶるも、大師は其教の極致は無相不可得にありと見給ふ。二教論に曰く

喩曰、此宗所觀、不過三諦。一念心中、即具三諦。此爲妙。至如彼百非洞遣四句皆亡、唯佛與佛乃能究盡。此宗他宗、以此爲極。此則顯教關楔、但眞言藏家、以此爲入道初門。不  
是秘奧、仰覺薩埵不可不思。

天台は三諦を明かすも究竟は言斷心滅の境を宗とすと釋し給ふは、三諦の外に

離言の法性これありと云ふにあらざるべし。三諦の理は即空即假即中なるが故に、不可說といふ。即ち三諦圓融の理は二乘凡夫は一分も證知せず故に言心を絶す、また初住以上は一分之を證すといへども、これ證の境界にして言斷心滅の極理なれば實に約すれば言斷心滅の理に歸すべき也。

天台には三諦三千の理を説き、その三千を談するや理事不二を明かすも、指要鈔に一性無性、三千宛然と云ふ、即ち無自性無相の理を本として三千の義を立す大師は、寶鑰に第八住心を釋するに

並是明法身眞如一道無爲之眞理、佛說此名初法明道、智度名入佛道、初門云云

智度論第五に如是等捨滅諸戲論、言語道斷、深入佛法、心通無礙、不動不退、名無生忍。是助佛道初門等。無生皆空の理は入佛道の初門なりと説かる、智度論の文を二教論には、之を引て三論宗の宗極と爲し、今は同き論文を第八住心の證とし給へりかくの如く無生皆空の理を明かす智度論の論文を第七八の住心に引き給へるにつき諸説あるも宥快師は下の如く釋せり。

三論天台七八二ヶノ住心俱一如ノ理ヲ以テ極トスル義同ナルガ故ニ二ヶノ

住心ノ證ト爲ス其一如ノ理ニ於テ二ケノ住心ノ淺深ノ事ハ一如空寂ノ心ニ於テ初後ノ不同有ルベシ寂滅ノ一心ニ住スル初心ハ是レ第七ノ住心也後心ハ是レ第八也凡ツ十住心ハ一種ノ心品ノ初後淺深也今第八住心ノ後心ニ至テハ寂滅心ノ上ニ有空不二ノ義アルベシ。

三論と天台は其宗極とするところ同一と云ふにあらざれども、天台の三諦觀なるものは中觀論の因縁所生法、我説即是空、亦爲是假名、亦是中道義の文、及び智度論の三智一心の文より出づるものにして、三論と天台は其教系一にして不可得無生觀の上の初心後心の不同なりと見るべきか。

凡そ眞言乘より見れば前九種住心の顯教の大小乘は、一の空觀を教義の根底とせるものと云ふべし。天台の通教の無生の理に別教圓教の中道の理を含むと云ふことは、これ別教圓教も一の空觀の理より開展せるものなることを示すものなり。參千圓具の理も法無自性の理より成す。故に究竟していへば三千三諦の理も無生不可得の理に歸すべし。されば法華經藥艸論品には究竟涅槃、常寂滅相終歸於空法師品には如來座者一切法空是安住是中(中畧)廣説是法華經等とい

へり。

前劫菩薩作戲論、  
無爲無相一道淨、  
心境絶泯常寂土、  
身心也滅大虛等。

此心正覺亦非眞、  
非有非無不二陳、  
語言道斷遮那寶、  
隨類影現變化仁。

六 第八住心の深秘釋

上來第八住心の淺略の釋一往終れるが故に其深秘釋をなさんに、寶論には深秘釋略せられたるが故に、今十住心論第八卷の深秘釋の文を抄出すべし。

此一道無爲住心有二種義謂淺略如前深秘義者下所説眞言門義是也。  
言一道無爲住心所説法門是觀自在菩薩三摩地門(中略)

是觀自在菩薩住普觀三昧説自心眞言曰、  
了(中略)若有衆生應從此門入法界者現觀音身授此法教若能受持讀誦速得解脫等同觀音菩薩若得此眞言密義一切法教皆悉平等平等。  
若依多名顯句經論疏等修行者徒積年劫空費身心不得證入法界等。

別説

第八住心は觀自在菩薩の内證法門なり。顯教の經論に依て一心三觀を修するも實相法界を證すること容易ならず、然るに密教に依り觀自在菩薩の眞言を念持し、觀音の三密門を修すれば、速かに觀音の内證に契合し、觀音の悉地を得る也。これ所謂五種の三味道に約する十住心の義なり。この一門より法界法身に契證するを普門大日の萬德に約する十住心と云ふなり。

## 第九 極無自性住心

### 一 第九住心の位置

第九住心は九顯一密の顯密合論に約する十住心の建立よりいへば、顯教の極果なり。第八住心に境智不二の一心に住し此一心を至極と執し、沈空滯寂せるとき菩提心の勢力と十方諸佛の驚覺開示に依り、境智不二の一心も無自性に於て究竟の住處にあらずと知り、第八住心の境智不二の心より起て第十の秘密曼荼羅海會に進む中間の心品を第九住心とす。大日經住心品疏に曰く

行者初觀空性時覺一切法皆入心之實際下不見衆生可度上不見諸佛可求爾時萬

行休息謂爲究竟若住此者即退不墮二乘地不進得上菩薩地名爲法愛生亦名無記心然以菩提心勢力及如來加持力復能發起悲願爾時十方諸佛同時現前而勸喻之以蒙佛教授故轉生極無自性心乃至心之實際亦不可得雖解脫一切業煩惱而業煩惱具存至此不思議地乃名眞離二乘也地

顯教の諸教は衆因緣無自性を説く、而も因緣無自性の至極を説くものは第九住心なり、即ち第四第五の住心は六因四緣の衆因緣所生の義趣を明かし、色心五蘊聚集の人體は空なるも五蘊色心の實體は實有なりと稱す。衆因緣の義を説きながら、なほ色心の自性の實有を明かし、其色心の法體の空を明かさざるは萬法唯心の理を説せざればなり。されば第六住心には唯識所變の理を説き、唯識所變の上に因緣生の義を説くが故に色心自性實有の執を離れ人法二空の理趣を明かす。第七住心は衆因緣無性皆空を説き第六住心に明かす唯識、眞如の自性の皆空を説き、而も心これ一切法、一切法これ心の境智不二の實義を明かさず第八住心は一切法衆因緣所生の故に無性なり、この無性これ心の實際なり。即ち萬法無性なるゆゑ心の實際ならざるはなく、心これ一切法、一切法これ心、

心と萬法との隔歴を見ず、心即法界に周遍し、心の外に一法を見ず、境智不二にして萬境皆心の實際なると悟るを第八住心究竟至極の果となす。

然るに此境智不二の心の實際もまた不可得無自性と覺るを第九極無自性心とす。

以上はこれ能攝の第九住心の所説なるが、當住心の所攝の宗教よりいへば、華嚴宗なり。華嚴宗を顯教の至極たる第九の住心に配屬するは、至極無自性の義を説けばなり。即ち其萬有の生起を談するや眞如法性無自性にして無明の薰習を受け、重々無盡の緣起を成ずることを明かす、其至極無自性の義、第九住心の極無自性説に相通するものあれば也。また其性海果分を説くやこれを不可説に屬するも、第十秘密果界の實在を暗示するものなるゆゑ、顯教の極果たる第九住心に攝在するなり。

佛教は何れの宗も因縁無自性を説くも、第九住心は至極無自性の義を明すが故に極無自性心と云ふ。華嚴宗は眞如法性無自性なるが故に染淨の因縁に従ひ無盡に緣起する理を説く、而して善無畏三藏及び高祖大師の提擲に依れば、華

嚴宗の法界緣起または無盡緣起なるものは眞如緣起説なり。眞如緣起説は性宗の通談にして第八住心にも眞如緣起を説く。然も彼は所謂理事無礙の義に約して諸法の圓融を明かし、當住心は眞如緣起して諸法と成るゆゑ諸法全く眞如、眞如全く諸法の故に、事々の諸法眞如の理の如く圓融して事々無礙する玄趣を唱ふ。

此の如く所攝の宗教たる華嚴宗は眞如法性至極無自性にして萬有を緣起する義を明かす、これ法の緣起にして下轉門の義なり。まだ能攝の住心は第八住心に明かす心の實際も無自性と知り、其心の實際に住せざるを極無自性の義とするものなれば、これ機の趣入即ち上轉勝進の義なり。上述の如く能攝の住心も所攝の宗教も共に至極無自性の旨を明かすも、一は上轉門一は下轉門の相違あり、かく上下二轉不同ありといへども、眞如法性の無自性の義は彼此同なるが故に共に第九住心の極無自性心の分齊となす。寶論の文に曰く

善無畏三藏説此極無自性心一句悉攝華嚴經盡所以者何華嚴大意原始要終明眞如法界不守自性隨緣之義云云

二 極無自性の得名

第九住心を極無自性住心と稱するは大日經住心品の經文に依る經に曰く  
離有爲無爲界、離諸造作、離眼耳鼻舌身意、極無自性心生。

大日經疏に曰く

得如時微細、惠時觀一切染淨諸法、乃至少分猶如隣虛、無不從緣生者、若從緣生即無自性、若無自性即是本不生、本不生即是心實際、心實際亦復不可得、故曰極無自性心生也。云云

快成法印の鈔に依れば極無自性の解釋に二義あり、隨て極無自性の文の訓讀自ら異なる。一義の意に依れば、極無自性と訓すべく、一義には極無自性と讀む極無自性との初義の意は極とは第八住心の境智不二の一心の理體を指す、此一心の至極の體も無自性と知る心品を第九住心の當分となす。第二の極無自性と訓する義は所謂至極無自性の義にして、これ華嚴宗に法性無自性のゆゑに緣起の萬有も極めて無自性にして、重々無礙なる義等に相應す初めの義につき宥快法印の釋を抄出せんに

極トハ第八住心ヲ極ト爲ス空理ニ沈ムナリ、此ノ理ハ遮情ノ理ニシテ實ニ極ニ非ズト雖ドモ極ト執スル情ニ約シテ且ク極ト云フナリ第八住心ハ諸法ハ從緣生無自性無自性ノ故ニ本不生ナリト覺ル從緣生トハ假諦ナリ無性トハ空諦ナリ本不生トハ中道ナリ三諦圓融スト雖ドモ中ヲ以テ諦トス此ノ中道ノ理ヲ極トス此位ヲ眞言宗ニハ法愛生ト名ツケ又ハ無記心ト名ヅク時ニ曼荼羅ノ諸佛彈指驚覺シテ極ニ非ズト示ス之ニ依テ此位モ自性無シ極ニ非ズト覺悟シ、極果第十住心有リト知テ進マント欲スル心品ナリ故ニ極無自性心ト云フナリ。問談鈔に曰く

極トハ顯教至極ノ空理ナリ第八住心此空理ニ沈ミ諸佛驚覺ノ時此極理モ無自性ト云フ勝進ノ心起スヲ極無自性心ト名ヅクルナリ即チ顯教ノ極理トハ天台ノ不思議圓融中道ニ當ル極無自性勝進道ハ華嚴ノ法界緣起事々無礙ニ當ルナリ云云

三 華嚴の所說

華嚴經は釋迦如來海印三昧、自證直顯の法門なれば、其究竟の理趣に至ては

等覺なほ羅穀を隔つ、輒く解すべからざれども、此宗所明の五教判教の一端を叙し、華嚴圓教の顯教に於ける無上の教なることを陳せんに

惣該萬有の一心に自ら五義を具するが故に、聖者隨て一門を以て衆生を攝化し自ら五教をなす。

愚法小乘教は六識を明かし第八阿賴耶識の如きは其名のみあつて識體を知らず、況や眞如一心をや、然も人空無我の理を説き、人空の理を證せしめ、三界分段の生死を解脱せしむ。

大乘始教の中、相始教は法相大乘の法門にして、第八阿賴耶識を説く、然も此八識たるや有爲生滅の心にして、未だ生滅と不生滅の眞如心との和合の阿梨耶識を明かさず、大乘始教の中の空始教は般若皆空の法門にして、衆因緣所生法の自性空を説じ八識に定實の自性なければ空なる旨を示し、無相眞如の一心に符はしめんとす。

大乘終教は所謂眞如緣起を明かし、宇宙萬有眞如の現起なれば、森羅たる事法の全體眞如の理にして、理事無礙、性相融通、一切衆生皆成佛道を明かす

大乘頓教は、緣起の識相を明かさず、直に絶對の眞心の直證を示す。即ち心識差別の事相盡き平等の眞心の露顯を説く。大疏に

此八識皆無自體唯如來藏平等顯現餘相皆盡。經云一切衆生即涅槃相等云云。されば心を起するは則ち生死、念を動するはこれ煩惱、無念これ佛智、無想これ涅槃、如來は頓悟の機の爲めに言語頓に亡じ、理性頓に顯るゝ頓教を説き給ふ。

一乘圓教に同教一乗と別教一乗とある、同教一乗とは三乗の義に同じて然も一乗の義を顯す故に同教と云ふ。別教一乗とは全く三乗に異なり、事々無礙圓融、相即相入、一即一切、一切即一、重々帝綱の玄旨を明かす、即ち上の終教の理事無礙頓教の事盡理顯、其教旨深遠なれども、なほこれ一相一寂の説なり今圓教には心識の無盡相即、無礙自在の玄旨を談じ、高く三乗教を超過し待對有るなし、これ別教一乗の所立にして、また華嚴經の本旨也。寶論に

近而難見我心細而遍空我佛我佛難思議我心廣亦大

中界

證此心時知三種世間即我身覺十箇量等亦我心盧舍那佛始成佛時第二七日與普



賢等諸大菩薩等廣談此義是即所謂華嚴經云云

#### 四 天台と華嚴

法相宗は前述の如く真如の理と萬法の事との不二相即を明かさず、三論宗は衆因緣生の諸法の無自性を説き、此無自性空理を法性の理となす。されば諸法の當相を動せず、其儘無自性空寂性なるが故に所謂色即是空、空即是色、事即理、理即事、有空一際、生死即涅槃、煩惱即菩提の實義を成す。されば法相三論共に不二中道を談ずるも、法相は事理、真俗の差別を見、然も二者の不離相依の義あるを中道といひ、不二等といふ、三論は諸法の性空即法性の故に有爲無爲一際、理事一如なるを中道といひ不二と云ふ兩宗の教義の淺深自ら明か也。三論と天台との教義の相異を約言すれば、共に理事不二を説くも所詮不同あり、三論の實際の位は無所得皆空にして差別の法を見ず、然るに天台は理事の三千を談じ法性の理體に本來三千の妙法を圓具し、緣起の事法も法性の理の如く三千圓具の玄旨を明かす。諸宗教理同異釋に曰く

今家明三千之體隨緣起三千之用不隨緣時三千宛然故差別法與體不二以除無明

有差別文既云不隨緣時三千宛然覺心乘實際位一理平等未見諸法別故兩宗真理寧非有淺深乎。

大經要義鈔に曰く

覺心一道二宗所詮優劣云何答三論唯覺理事不二天台亦知事事圓融二宗勝劣可以辨耳。

次に天台と華嚴の兩宗共に圓一乘にして其淺深分ち難きものあり。然も大師は天台を第八住心に華嚴を第九住心に攝在し二教に淺深優劣あることを示し給ふ。今大師及び先徳の提撕に依て其義を略述せんに、天台の一念三千、華嚴の事々無礙圓融俱に萬有の當相に無限の理趣を圓具せるを示す一乘教なるも、二教また淺深なきにあらず。

一、天台の三千圓具は本經に其文なきも華嚴の事々無礙は如來の誠説なり。華嚴經を翻讀すれば一指端上に一切の世界を盡し、一微塵中に無量の佛を見、一塵に大千の經卷を含むとの重々無盡の玄旨は至るところに見る。然るに法華經方便品等に諸法實相、十如是の文なきにあらずれども事々圓融の明文を見ず

即ち天台の三千圓具は祖師の釋義に起る。賴喻法印曰く華嚴事融出乎如來之誠說。天台性具起於祖師之釋義。寧無淺深乎。況復彼多云心。此多云塵。色心相望。塵猶事義勝矣云云。

一、天台華嚴の二宗俱に事理圓融を談ずるは所說同なるが如くなるも、二宗の教格不同なきにあらず、天台は實相門にして横に諸法の實相を觀じ、俗諦常住を明かすを宗とし、華嚴は緣起門にして無盡緣起を宗旨とす。而して華嚴の無盡緣起はこれ因分の法門にして果分不可說の境にあらず、此無盡圓融の外に更に果分の性海を指し十佛自境界となす。然るに天台は三諦圓融の妙理を以て極とし、果分の境を知らず、大經要義鈔に曰く天台云、自宗所詮爲法之極。此醉而謂醒。華嚴云自宗所詮以爲因分。此醉中知醉。寧非淺深乎。

一、諸宗教理同異釋に曰く性具約理。性起約事。故兩宗差降。性起猶勝。何況果性不可說乎。二宗究竟するところをいへば天台は性具、華嚴は性起を談ずるにあり、性具は比較的理に近く性起は事に近し。而して事具を勝ぐるゝとなす所以のもの。天台は理具の故に一法界、華嚴は事々多法界の淺略なり。多法界を眞言宗

の本意とするが故に此多法界の本旨に近き華嚴を深なりとして天台の上位に置きしなり。然れども事々無礙の體を眞言に六大と説きしものにして華嚴と眞言と教體同なりと云ふが如き釋をなすべからず、即ち大師は華嚴の事々無礙はこれ因分の法門なり。彼に云ふ果分これ密教の本分なりといへり。眞言宗は華嚴に云ふ性海果分の上に教を立るものにして、華嚴と眞言と因果二分の淺深あることを無視すべからず。

一、天台に三千圓具を談じ、華嚴に事々無礙を説き何れも事々圓融の理趣を開示するも、無生の理を本とせざるはなし。諸法無自性の故に一念に三千を具し一塵に法界を含攝す。法華の藥草論品には、如來知是一相一味之法。所謂解脫相。離相滅相。究竟涅槃。常寂滅相。終歸於空。法師品には如來座者一切法空是也。提婆達多品には今皆修行大乘空義。演暢實相等。

即ち諸法實相も世間相常住も直に本經に見ば無性寂滅の理を云ふものゝ如し。華嚴の佛昇須彌頂品には

一切法無生。一切法無滅。若能如是解。諸佛常現前。無取亦無見。空寂無眞實。諸佛本來

空云云

菩薩功德品には無礙寂滅觀。是即佛正法。

十廻向品には安住實際。無有自性離諸性故。

於一念中解一切法。無性爲性等。

かゝる文義は經中至るところに見る。兩宗共に寂滅無生の理を本として無礙圓融を談ずるも、華嚴は無礙を明かすこと天台より勝れたるものありと、また其果分の實在を説き、秘密曼荼果界を暗示するものあるゆゑ、天台の上に置きしなり。天台華嚴の優劣については八九淺深の決擇等の義に依り述ぶべきこと多々あるも今は省略しぬ。

五 第九住心の行相

先きに寂照不二、一道清淨の理より立て第十の住心に進む中間これ第九の住心なりといひしが、此第九住心の行相につき釋述せざるべからざれども、十住心論第九卷の文の一節を引用し、叙述に代へん。

三藏又云。行者得如是微細慧時觀一切染淨諸法。乃至少分由如隣虛。無不從緣生者。

若從緣生即無自性。若無自性即是本不生。本不生即是心實際。心實際亦復不可得。故曰。極無自性心。此心望前二劫。由如蓮華盛敷。若望後二心。即是果復成種。故經曰。如是初心佛說成佛。因又極無自性心。明真如法身蒙驚覺緣力。更進金剛際。據大日經及金剛頂經等云。時婆伽梵大菩提普賢大菩薩。住一切如來心。寂滅無相平等究竟真實。時金剛界一切如來現受用身。彈指驚覺告曰。善男子。汝所證是一。一道清淨未證秘密金剛三摩地。勿以此爲足。時一切義成就菩薩。由一切如來驚覺。即從無色身三昧起。禮一切如來。自言。世尊。如來教示我所行道。云何修行。云何是真實。一切如來異口同音告彼菩薩言。善男子。當住觀察自心。三摩地。從此已後。說五相成身真言。由此五相真言加持。得成大日尊身云云。

六 深秘釋

以上の所説はこれ第八住心に於て驚覺開示を蒙り、第十住心へ進む所謂從顯入密の義に約して第九住心を釋せしなり。これ第九住心の淺略釋なり。其深秘釋たる五種三昧道に約する十住心よりいへば、當住心は普賢菩薩の内證法門にして普賢の三昧を修し、一門の果を成ずるにあり。また此三昧より普門大日の

別説

果を成するに至れば、これ普門大日の萬德に約する十住心の義なり。十住心論に曰く

次秘密趣者、自上所說極無自性住心者、是普賢菩薩所證三摩地門亦是、大毘盧遮那如來菩提心之一門也云云

經云、時普賢菩薩住於佛境界莊嚴三昧、說自心真言、

凡言不生不滅、不取不捨、不增不減、

若有衆生從此法門而受持讀誦、或觀照者、即同普賢之門、不久能得佛境界莊嚴三昧自在之力。

### 第十 秘密莊嚴心

#### 一 總 說

大師は第十住心を釋せんとして、最初に左の頌を提示せらる。

九種住心無自性、轉深轉妙皆是因、

真言密教法身說、秘密金剛最勝真、

五相五智法界體、

四曼四印此心陳、

刹塵渤駄吾心佛、

海滴金蓮亦我身、

一字門含萬像、

一刀金皆現神、

萬德自性輪圓足、

一生得證莊嚴仁、

この頌文に第一住心より、轉深轉妙、遂に第十住心に趣入する住心轉昇の次第及び第十住心の法體を開演す。されば此頌文に無盡の義趣を含まるも、其大綱を略述せば

九種住心無自性。轉深轉妙皆是因。

この二句は前九住心眞實ならざれば、前九住心の當位に留らず、遂に第十秘密莊嚴心に歸する旨を明かすものなるが、この九種住心無自性の一句に相說旨陳等幾多の義ある中、今一途の法相に依て解せんに前叙の如く佛敎は諸法因縁生の理を説く、而して、最初三ヶの住心はこれ世間敎にして、善因善果、惡因惡果の義を明かす。即ち十惡業の因に依り、地獄、餓鬼、畜生の三惡趣に墮し、五戒十善等の善因に依り、人界天界の果報を受くることを説く。然も三界六趣

の有爲有漏因果の境界は、畢竟これ生死輪廻の迷界なれば、この三界六趣の迷界因果の系統を解脱し、この因果を遠離せる無爲常住の涅槃を體得する道を明かすものは、第四住心以上の出世間の法門也。而して第四住心より第十住心に至る道程、所謂轉深轉妙五百由旬その道遙かなるも、回心向大、驚覺開示進趣の歷程に於て一大轉機をなすは、第四第五住心より第六住心以上に進む時機、即ち小乗より大乘へ回心向大の時と、第八住心に沈空滯寂の時、諸佛の驚覺開示に依り、第八住心より起つて第十住心へ趣入の刹那、即ち顯教より密教へ歸趣の時となす。

世間生死の非眞實を厭ひ、湛然寂靜の無爲眞實を求め、人我の空理を體得し、身心都滅、無餘涅槃に歸入する道を明かすは第四第五の住心、即ち小乗佛敎の所説なり、この無餘涅槃より立て大乘の大涅槃へ發趣する回心向大の義は、第四第五住心の章下に釋せるが如し。而して小乗の涅槃より發趣する大乘の大概涅槃界たるや、大乘諸宗の所説一ならざるも、その涅槃の實體は、眞如法性の理體なり、この眞如は十界依正の本性にして、豎に三世を貫き横に法界を該ね

法爾絶對の體なるも、然も諸大乘敎の所説に依れば、眞如法性は生佛の假相を絶する無相無我の非人格の理體なり、かの第八住心に於て沈空滯寂、上諸佛の求むべきなく、下衆生の度すべきなく、一味眞如の體を證得し、究竟の證悟となすの境なり、この第八住心に沈空滯寂のとき、秘密の諸佛の驚覺開示に依り一道無爲の境より立て第十の秘密莊嚴心へ進むは、これ所謂顯教より密教へ歸入するものにして、こゝには實に顯密二敎の教義につき、種々の相異點を觀取せらる。

第八住心に沈空滯寂すとは、これを大日經疏の意にて解せば、その證悟の道體たる無相一心は、支那天台の山外に明かす自性清淨の一心に親しき觀あり。たとひ山家の説の如く、十界の諸法宛然並び立ち、然も自性無性三千互融、因果の差相を能生の一心に歸せず、大乘の因果は皆これ實相なれば、因心互融の理を觀じて妙覺の果を成する意に解し、萬有の奥底に一味の法體あるにあらず、差別の背後に平等の理あるにあらず、萬有の差相に即して一味平等の理趣を觀んとする意なりとするも、なほ密敎の説と大なる相異の存するものあり。即ち

顯教の涅槃の體たる眞如は法にして人にあらず、密教にても法性果體は人法不二なりと説くも、顯教に對して、其教の特質を明示せば寧ろ人を本とし、本地法身なる靈的實在者を體とすと云ふべし。また顯教は寂にして照、虛通妙融の實相を諦觀する理智を本とするものなるが、密教も寂にして照、法界を了々に照見する靈智の顯得を明かすも、然も無盡曼荼の諸尊、各々の靈性は、各々の本誓三昧耶に住し、各々法界曼荼羅を成し、三密門を以て無盡の妙用を現することをも明すもの也。即ち顯教は理性を本とするものなりといひ得べくんば、密教は自覺的靈格を體とするもの、意志を本とするものなりといふことを得べし。かの第八住心より第十秘密莊嚴心に歸するを説き、或は勝義の菩提心より三摩地の菩提心に入るを明かすは、これ理智の立場より意志の立場に飛躍するを明かすものとも觀らる。固より三種の菩提心は不離にして、佛金蓮の三部は同體、大定智慧は不二なるべきも、三摩地の菩提心は體にして勝義行願は用、佛部は蓮華部金剛部の體なること經疏の説相分明なり。

即ち顯教は能所一如の理に契合する極をとし、密教は此の能所一如の玄底に

更に十界曼荼羅を開見し、この曼荼羅の世界の佛と衆生とは、法爾として靈的融合をなせる本有加持の理趣を明かす。この本有加持の理趣を體し、修生三密の行に依り、本有の靈性を體驗し、自心本有の曼荼羅體を開顯するを説くものなり。かゝる秘義は眞言宗にて始めて開説するが故に

眞言密教法身說 秘密金剛最勝眞。

等と釋し給へり。眞言密教法身說、この一句は前九種住心は他受用、應身の説なるも、眞言密教は法身佛の所説あることを示す。秘密金剛最勝眞、この句は眞言教の最勝眞實なるを明かす、即ち秘密金剛とは身口意の三密金剛の義にして、法身所説の教は如來無邊の三秘密金剛の眞義を説く、一乘教なることを顯す。

五相五智法界體。 四曼四印此心陳。

刹塵渤駄吾心佛。 海滴金蓮亦我身。

一一字門含萬像。 一一刀金皆現神。

萬德自性輪圓足。 一生得證莊嚴仁。

此等の文は能所一味、不二果海の境に開見する曼荼羅の體、即ち秘密莊嚴の實相を釋せるものなり。所謂顯教は一道眞如の自體も、なほ不可得なり無自性なりとして、一心眞如にも住せず、能所主客の泯絶するを説くものなるが、大師の教義はこの能所主客を絶する不二一實の境に、更に能所主客、色心因果、生佛自他の實相を明かす。かの即身成佛義に都絶能所の上に更に法爾の能所を見ると云ふものこれなり。然もこの都絶能所の上の能所、不二一實の境はこれ果上佛智の境なれば、無碍自在、加持瑜伽の世界なり。されば此境にては色即心、心即色、理即智、智即理、性即相、相即性無障無碍にして一一皆無邊の佛徳を圓具せざるはなし。大師は此秘密曼荼羅の境を釋せんとして五相五智法界體等と開演せるがこの頌文の一端を解せば、五相五智法界體とはこれ所謂體大を釋せるものなり。四曼四印此心陳この句はこれ體大より開發せる相大の釋なり。體相用三大圓融の實義をこの住心に陳すとの義なり。刹塵渤駄吾心佛以下の四句はこれ四曼相大の別釋なり。其中初の二句は佛蓮金の三部の法相に依て大曼荼羅の義を明かす。刹塵渤駄即ち無邊の佛部の諸尊自心に圓具し、海滴金蓮即ち

無量の金剛部葉華部の諸尊は自身の實相なる旨を示す。

一一字門含萬像とは四曼の中の法曼荼羅なり、阿字等の諸字門に無邊の義趣を有するの義なり。

一一刀金皆現神これは本尊の本誓を表示する三昧耶曼荼羅の釋にして、刀は刀劍、金は獨鈷杵等の諸尊の所持物なり。これ皆諸尊の本誓三昧耶を表し、神變靈用を現することを明かす。

萬徳自性輪圓足 一生得證莊嚴仁 この句は前叙の義の結釋なり。即ち我等の身心に無量の佛徳を具するが故に、實相の理に住し、如實に修行せば、一生に無盡莊嚴の佛身を成ずることを示す。而して上の頌文は體相二大の義を釋するものなれば、今の萬徳自性輪圓足の句は即身義の三密加持速疾顯と義趣を等うるものにして、これ三密用大の意に依て釋をなせるものとも見らる。要するに密教は顯教に説く絶離の境界たる法性果界に、諸佛と衆生との本有三密の加持を明し、この本有三密加持の理趣を體し、如説に修行せば、本有三密たる曼荼羅の體を現證する秘趣を説くものなり。





歸命一切金剛、我身即同金剛

大日經疏第九には、此三種三昧耶の深義を委釋せり。其一義の釋に依れば、我等の三密を如來秘密の身口意平等身に同せしむるに依り、如來の聖胎に託し（入佛三昧耶）金剛の佛子として出生し法界生よく如來金剛の事業を作爲す（轉法輪）即ち三種三昧耶は、入我々入の秘觀に住し、我即法身、我即金剛子の眞自覺を成じ、如來の事業を作す、これ密教の本義なることを示せるもの也。

大師は即身成佛義に、心佛衆生の身口意の三密は平等平等にして一なり、一にして而も無量、無量にして而も一、不同にして而も同、不異にして而も異、なること、宛も鏡中の影像と、燈光の涉入の如くなる秘義を明かさんとして入佛三昧耶の眞言を引用せらる、大日經疏の入佛三昧耶の釋に曰く、  
以此持明得入佛平等戒即是託聖胎義也。

又曰く  
眞言行者以初三昧耶故得同如來秘密身口意平等之身云云

三平等の秘觀に住し、諸佛法界身なるが故に、我身諸佛の身中にあり、我身法

界身なるが故に、諸佛我が身中に在り、諸佛の靈力自身にあるを體し、佛家に生在する實義を示すものは、かの法界生の眞言なり。大日經疏の法界生の眞言の釋に曰く、

以必定師子吼言我及一切衆生皆是法界自性是平等義我當設種種方便令一切衆生皆悉證知是本誓義以知我即法界自性故能除一切分別開淨知見是除障義諸佛唯願憶持本願故令我此身即同毘盧遮那法界自性是驚覺義云云

又曰く  
諦觀一切衆生皆悉聖胎具足生在佛家爾時無盡莊嚴亦復與如來等從此三昧起已即說法界生眞言

已に佛家に生在し、佛子として如來の事業を作爲する秘義を明かすものは、轉法輪の眞言なり。大日經疏に轉法輪の眞言を釋して曰く、  
謂我身即同金剛也金剛即是法界自性以成就大堅固力不可沮壞故異門說爲金剛如來以普眼觀一切衆生金剛智禮與我無異是平等義以衆生不自覺知故從無量金剛智門作種種金剛事業要摧如是障令至實際是本誓義

又曰く

諦觀見此一一衆生金剛事業具足成就爾時無盡莊嚴亦復與如來等云云

又曰く

由金剛薩埵故能轉家業備諸伎藝

要するに三種の三昧耶は、衆生の身心をして、如來不思議の身に融會せしめ、佛子としての自覺を得て、佛業を成ずるに至る道を明かすものなり。以て密教は入佛道の最初より、佛地の三昧に住するものなり。因分を超越せる果上の法門なり、本覺爲宗なり、神通の寶輅に乗じて、直に所詣に至るものなり等の深意を思ふべきなり。

#### 四 十住心

上來の叙述に依て第十住心所明の法門の大要顯れたるも、なほ寶論、十住心論等に依て釋せんに、秘藏寶論の第十住心には、大日經及び菩提心論の三摩地段の文を引用し給ふ。其中三摩地段の義より解せば、菩提心論には勝義、行願三摩地の三種の菩提心を明かす。勝義、行願とは因縁生法の無自性を觀する無

我の智勝義と因縁の差相を觀じて大慈悲行願を起す心なるが、この勝義行願の二心は所謂因縁生法の無自性を明かす、顯教大乘教の根本義にして、第九住心までの所明の法門無量なるも、この勝義行願の二心に攝せざるはなし。然るに第三の三摩地の菩提心は正しくこれ秘密教の教體なるが故に、第十住心に引用し給ふ。三摩地菩提心の義趣深奥、法門無量なるも要約していへば、因に約せば我即金剛薩埵、果に約せば我即大日の大自覺を成ずるにあり。即ち一念深く毘盧遮那本地法身の靈體に契合し毘盧遮那の本誓を已が本誓三昧耶とし、如來の妙用を作すにあり。然も一念よく此秘境に達する能はざるものは、凡生不二の三摩地の心に住し、本尊の三密を修すべきなり。而してかゝる機根はなほ本尊と自身とに、能所隔歷の執を存す。自身と本尊とに能所差別を存するが故にたとひ生佛不二の心に住し、三密平等の觀行を修するも、所感の佛身は毘盧遮那本地法身より、緣現せる報應二身の加持身なり。然るに觀行淳熟し、微細の能所を離るゝに至れば、本地大日如來の遍一切身を諦見するを得、即ち報應の加持身に即して、毘盧遮那遍一切身を見る。毘盧遮那遍一切身を見るに至れば

この遍一切身即ち我等衆生の自身なり。即ち自身と本尊と全く同一體にして本尊の自在力、大堅固力自身にあるを知り、妙用淨業窮りなきに至る。これ正しく三摩地の菩提心を體得するものなり。

三摩地菩提心に體用あり、その體よりいへば十界依正の色心實相悉く六大法身の體性なりと體得する位也。その用よりいへば五相三密の觀行を修し、加持身を見、本地身を見、自身毘盧遮那本地法身と同一體なる一大自覺を成ずる修行成佛の機根の進趣の行相これなり。大師は三摩地の菩提心を五部秘觀、三密妙行と釋し給ふは、その用より見給ひしものにして、善無畏三藏の三摩地者更無別法直是一切衆生自性清淨心名爲大圓境智上自諸佛下至蠢動悉皆同等無有増減文と釋し給ふはその體を明かすものなり。

勝義行願の二心は顯教にして、三摩地菩提心は密教なりと云ふは一往の説なり即ち九種住心の無自性を觀じ、遂に第九住心より第十住心へ進む捨劣得勝の深般若の妙慧はこれ勝義の菩提心なり。而して第八住心に沈空滯寂の時、諸佛の驚覺開示に依り無相一心もなほ至極にあらざるを知り第八住心より立て第十へ

進むはこれ勝義の菩提心より三摩地の菩提心に轉入するもの、即ち顯教より密教に入るもの、機根についていへば從顯入密の迂回の機の趣入の次第にして、九顯一密の十住心建立の義なり。此の如く勝義行願は顯教にして、三摩地を密教と見るは顯密相望の一往の説なり。再往の實義よりいへば三種の菩提心に各々三種の菩提心を具するが故に、三摩地菩提心にまた勝義、行願の二心あり、三摩地菩提の見地よりいへば、三種菩提心は不離なるも、三摩地は體にして、勝義、行願は用なり。勝義行願、向上向下は一の三摩地菩提の轉起なるが故に同體不離にして、從因至果、始覺上轉の勝義菩提の當相に即して、從果向因本覺下轉の行願菩提あり。即ち始覺上轉の行相、これを其法體より見れば、これ本覺果徳の體性を實現しつゝあるものなり。即ち三摩地菩提の上下二轉は同時具足なりと知るべし。

要するに顯教は勝義行願、向上向下たゞ菩提心の相を明かすのみにして、未だ深く菩提心の實體を示さざるが、密教は三摩地菩提の體に住し、向上向下、自證化他無盡の妙用を説くものなり。

十住心論第十に秘密莊嚴心を釋して曰く

秘密莊嚴住心者。即是究竟覺知自心之源底。如實證悟自身之數量。所謂胎藏海會。曼荼羅。金剛界會。曼荼羅。金剛頂十八會。曼荼羅是也。

又曰く

經云。何菩提謂如實知自心。此是一句含無量義。豎顯十重之淺深。橫示塵數之廣多。即自心所具の無盡莊嚴の體を體顯する、これ第十秘密莊嚴心なることを示さる。而して此無盡莊嚴の體を體得するに横豎の二門。即ち平等差別の二門あることを明かさる。此中の豎の義とは如實知自心、三無盡莊嚴の秘密の體は、獨り第十住心にあり、前九住心の如きは、一分其作用を知るに過ぎず、所謂自心とは衆生内心の大我、即ち兩部大日尊特の體なり。三密具足して一切處に遍在し、其靈用法界に遍するが故に、一向行惡行不修微少善の第一の住心も、遂に第二の住心を生起す。これ即ち如實知自心の一分なり。此の如く次第轉昇して第二住心より第三住心に進み、乃至第十住心に至て、究竟して自心の源底を覺知し、三無盡莊嚴の恒沙の己有の曼荼羅體を開見す。これを豎と云ふ。

横の義とは一切衆生本來法爾として、無盡の三密を具し、各々法界曼荼羅を建立し、各々の當位に即して一種の差別智印なるが故に、各々如實知自心に住す。大師の釋に

上從大日尊下至六道衆生住各各威儀顯種々色相並是大日如來之差別智印。

此の如きは即ち横の義なり。頓入の眞言行者は、横平等を以て境界とし、初發心の時、直に自心の實相を觀じ、本不生を了するが故に、凡聖の中間に於て一分の位を立てず、發心即到する也。

豎次第に進修する機根また無量なるべきも、從顯入密の迂回の機と最初より密教に住する修行成佛の人との此二種の機根は一切の機根を代表するものなり。これらの行相、前々述べしが如し。十住心論第十に曰く、

又云。復次志求三藐三菩提。句以知心無量故。知身無量。知身無量故。知智無量。知智無量故。即知衆生無量。知衆生無量故。即知虛空無量。此即横義。

衆生自心其數無量。衆生狂醉不覺不知。大聖隨彼機根開示其數。唯蘊拔業。二乘但知六識。他緣覺心兩教但示八心。一道極無但知九識。釋大衍說十識。

大日經王說無量心識無量身等知如是身心之究竟即是證秘密莊嚴之住處云云  
 此等の釋は心識の建立につき横豎に約して、秘密莊嚴の義を明かすものなり。  
 即ち豎次第門よりいへば、小乗は六識を説く、六識は六塵を縁する意識作用なり、權大乘にては更に七八二識を明かすが、第七識は我見を生ずる妄識にして第八識は眞妄和合の識なり。その第九識は實大乘に説く所の阿摩羅識にして、この第九識は唯眞非妄の眞心にして、これ眞妄未和合の微細の識體なり。この唯眞非妄、眞妄未和合の識體は深細なれども、なほ眞妄相對の眞なり。即ち理智相待していへば、なほ智中の理なり。然も心性の體は非眞非妄、非有爲非無爲の絶對の眞心にして、所謂唯理絶對の體なることを明かすものは、釋摩訶衍論に説く、第十一一心識なり。此の如く六七八九十豎次第の法相よりいへば、其第十一一心識は、これ實に所入所詣の心地の極致なり。然も大師の密教よりいへば、かゝる非眞非妄の心識は、これなほ遮情の極にして、表德曼荼羅の實義を明かすものにあらず、されば密教はこの非眞非妄の遮情の玄底に、更に無塵無數の表德の心王心數を開演す。大日經の無量の心識、金剛頂經の五智三十

七智乃至無盡の心數の説、釋摩訶衍論の不二心、大師の心數心王主伴無盡、色心無量、實相無邊の釋、此等は其名相異なるも、法體は何れも表德無盡の識體を明かすものなり。この表德無盡の識體は、十界の迷悟の差相を動せず、毘盧遮那如來の一種の差別智印なりと開見するものにして、これ不二門横平等の説なり。この不二果界の無盡の色心、無量の理智これ秘密莊嚴の體なることを明かすものなり。

十住心論第十に又曰く

今此心王如來無始無終各各安住自法界三昧故下文云時薄伽梵大日如來廣大法界加持即於是時住法界胎藏三昧說入佛三昧耶  
 時釋迦牟尼佛住寶處三昧說自心及眷屬眞言如是普賢住佛境界莊嚴三昧彌勒住發生普遍大慈三昧觀自在住普觀三昧金剛手住大金剛無勝三昧等類皆悉是也  
 無量十佛刹微塵數三部五部諸尊四種曼荼羅各各住自證三昧是也  
 一切持金剛者皆悉集會者此明心數妙眷屬  
 心王所住之處必有塵沙心數心數爲眷屬今者心王毘盧遮那成自然覺爾時一切心

數無不即入金剛界中成如來內證功德差別智印、如是智印唯佛與佛乃能持之。

約菩提義則有無量無邊金剛印約佛陀義則有無量無邊持金剛者。由斯衆德悉皆一相一味到於實際故名集會(中略)

然此毘盧遮那內證之德以加持故從一一智印各現執金剛身形色性類皆有表象各隨本緣性欲引攝衆生。

若諸行人慇懃修習能令三業同於本尊從此一門得入法界則是普入法界門。或 はまた金剛頂經の五智三十七智等曼荼羅の諸尊の深義を説ける經文を引用し其經意を述して

平等智身者智者心用身者心體平等者普遍言五大所成三密智印其數無量身及心智遍滿遍滿三種世間動作佛事刹那不休云云

此の如く無盡の諸尊、無邊の三密、各々盧遮那自性の境に住し、各々本誓三昧耶より、無盡の靈用を示現するなり。然も秘密莊嚴の自體豈それ遠からんや、一切衆生の身心の自性、本來秘密莊嚴の體なり。十住心論に又曰く

今此眞言秘密身口意則是法佛平等身口意然亦以加持力故出現于世利益衆生如來無礙知見在一切衆生相續中法爾成就無有缺減以於此眞言體相不如實覺故名爲生死中人若能自知自見時則名一切知者一切見者云云

一切衆生は同く秘密莊嚴の境に住すといへども自ら知らず、是故に如來加持力を以て、世に出現して、現身に秘密莊嚴の體を體得する眞言の法門を説き給ふ若し衆生此法に依て觀修すれば、秘密莊嚴の體を開見するを得るなり。

# 秘藏寶鑰の大綱 畢

大正十三年八月二十五日印刷  
大正十三年八月二十八日發行

複製  
不許

著者

金山 穆 韶

發行者

白井 覺 範

印刷者

沖本 寅 雄

印刷所

六大新報社印刷部

京都市坊城通り東寺西門上  
京都市三哲大宮東入一番地

發行所

京都市下京區三哲  
大宮東入一番地

六大新報社

秘藏寶鑰の大綱

511  
76



終